

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

冬めくや丸薬一丁転げ落ち
 (下諏訪町) 木口 碧

老犬のどろりと寝付く冬日向
 (佐久市) 市川小夜子

裸木の影長く手を繋ぎをり
 (松川村) 岡 豊村

氏神の格子戸閉めて神無月
 (飯田市) 大石 昭重

冠着山の冠飾る冬の月
 (千曲市) たしまたける

単線の駅舎にいまも落葉籠
 (安曇野市) 加藤 文人

千歳館持たない指でVサイン
 (長野市) せきたつお

冬囀の指の記憶の朽むすび
 (佐久市) 神津 武士

わらにおをくつし喰らった大目玉
 (富田村) 佐野 栄一

将棋盤孤独なる音小正月
 (長野市) 斎藤 俊幸

佳作
 天心へ点となりゆく鷹柱
 (佐久市) 栗林 貞夫

くしやみして言葉忘れぬ掘炬燵
 (佐久穂町) 太田 春子

選評

一句目、あたりまえだが丸薬は丸い。冬めく日は指先も寒さでかじかんで丸薬が転がって落ちてしまった。こんな事にも冬の訪れを感じた作者。二句目、冬の日向は人も犬も気持ち良いものだ。わが

家の老犬もそれに誘われてとろとろと寝付いてしまった。三句目、葉を全て落とした木の影は手を広げた人影のように見える。それが2本並んでいる。あたかも仲良しの2人が手をつないだように。

今井 聖 選

乗り継いで浅間の山の後さきり
 (長野市) 竹内三重子

冬めくし夫の腰ゴム伸び切りて
 (辰野町) 矢島あさ子

コンビニの夜学終へたる人に混む
 (長野市) 北沢 亨子

フラッシュが夜の紅葉を映し去る
 (伊那市) 中村 茂子

霜晴や池の家鴨の白きこと
 (上田市) 竹内 重業

霜除けの藁ふんだんに重ねけり
 (南相木村) 猿谷 秀

墨痕となりし大河や冬紅葉
 (松本市) 石垣 立夫

裸木の日向ありけり善光寺
 (長野市) 金谷 仁世

引き出しに手を借り寒夜立ち上がる
 (佐久市) 西田 和彦

も一人の口を誘ひ温め酒
 (塩尻市) 古厩 林生

佳作
 柿むくや一息も一息もして
 (佐久市) 水間喜美子

木偶のごとく人ゆく雪の駅頭を
 (長野市) 武田 芽子

選評

一句目、電車を乗り継いでいるうちに故郷の山が遠くなる。旅に出た実感である。二句目、夫のスポンを支える腰のゴムの緩さに気づく。ゴムの年期、スポンの年期、そして夫の老いにも。三句目、

夜学を終えた人でコンビニが混んでいる。学びと生活、両者のエネルギーを思う。四句目、フラッシュに映し出された紅葉の鮮烈な朱を思う。夜であればなおさらのこと。

神野 紗希 選

知事賞のとなりの鉢が俺の菊
 (塩尻市) 林 行男

わたくしのあなくなるまで毛糸編む
 (松本市) 久我 綺乃

十二月兄に赤紙来し八日
 (長野市) 小池 保子

吾は神のプラモデルなり寒鳥
 (小諸市) 加藤 陽介

夜の狐見て声高に言う子かな
 (松川村) 岡 豊村

小春日やローズヒップの赤つややか
 (須坂市) 東島賀代子

佐渡指して拉致語るひと冬の虹
 (坂城町) 柄沢 満則

単車過ぐ赤き革ジャン抱きついて
 (上田市) 竹内 創造

争いや飢餓のなき日よ石路の花
 (富士見町) 鬼東 淳子

峡の朝冬雲靴み空重し
 (飯田市) 大石 昭重

佳作
 オッドアイの猫の見上げる雪蟹
 (長野市) 北沢 時江

雨の日の炬燵のこけりこけり蝶々
 (飯田市) 黒木 暮空

選評

一句目、よりによって知事賞の隣とは。本音感の強い「俺の」という一人称を用い、諧謔と矜持をにじませた。二句目、毛糸を編むときの無我の没入を自身の言葉でたっぷり述べ、私という存在のはか

なさまで手を伸ばす。三句目、国民の記憶としての開戦日、家族の記憶としての8日。四句目、人間はみな神の創りたもうた玩具なのかも。冬天を統べる昴星の鋭い光が、神のごとく人間の愚を見下ろす。